

國學院大學學術情報リポジトリ

心に詠ずる花：西行和歌における歌道と仏道の共振

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-04-10 キーワード (Ja): 西行の和歌観, 思ひやる心, 花に染む心, 心のうち, 観想 キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也, Araki, Yuya メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000276

心に詠ずる花

— 西行和歌における歌道と仏道の共振 —

荒木優也

一、はじめに

西行〔1181-88〕は、花月の歌僧とも言われるようにその生涯に多くの桜と月の歌を詠み、その歌には桜と月に惹かれ翻弄される姿が表現されている。たとえば、桜について見てみると、彼の私家集『山家集』には「花の歌あまた詠みけるに」〔春・六二〇八六〕という二十五首に及ぶ歌群があり、その前半部分〔六二〇七六〕十五首のうち九首も、「心」「心地」という言葉とともに桜に対する思いが詠み込まれていることは興味深い^{〔1〕}。

花の歌あまた詠みけるに

○吉野山雲をはかりに尋ねいりて心にかけてし花を見るかな

〔六二一〕

○思ひやる心や花に行かざらん霞こめたるみ吉野の山

〔六二二〕

おしなべて花の盛りに成りにけり山の端ごとにかかる白雲

〔六二三〕

紛ふ色に花さきぬれば吉野山春は晴れせぬ峰のしら雲

〔六二四〕

○吉野山梢の花を見し日より心は身にもそはず成りにき

〔六二五〕

○あくがるる心はさても山桜散りなんのちや身に帰るべき

〔六七〕

○花見ればその謂れとはなけれども心のうちぞ苦しかりける

〔六八〕

○白川の梢を見てぞ慰むる吉野の山に通ふ心を〔六九〕

△しらかはの春の梢の鶯は花のこゝばをきく心地する〔七〇〕

ひきかへて花みる春は夜はなく月見る秋は昼なからなん

〔七一〕

花散らで月は曇らぬ世なりせば物を思はぬわが身ならまし

〔七二〕

比ひなき花をし枝に咲かすれば桜にならぶ木ぞなかりける

〔七三〕

身をわけて見ぬ梢なく尽くさばやよろづの山の花の盛りを

〔七四〕

△さくら咲く四方の山辺を兼ねる間にのどかに花を見ぬ心地

する

○花に染む心のいかで残りけん捨ててきと思ふ我が身に

〔七六〕

「心」を詠んだ七首には○、「心地」を詠んだ二首には△をつ

けて示してみた。「心にかけし花」〔六二〕のため「思ひやる心」

〔六三〕が生じ、その「心は身にもそはず」〔六六〕桜に「あ

くがる心」〔六七〕が詠まれる。また、「心のうち」が桜を見

ると「苦し」く感じ〔六八〕、桜の咲く「吉野の山に通う心」〔六九〕

を慰めるために吉野と同じく花の名所である白川の桜を見る

と、鶯の鳴く声に「花のこゝば」を聞いた「心地」〔七〇〕が

する。そして、いろいろな山の花を見ると「のどかに花を見ぬ

心地」〔七五〕がし、そういった感情も「花に染む心」〔七六〕

のために起こるものであり、そういった執着に染まる心は捨て

たはずであった自分を省みる。そして、この歌のあとに釈迦の

命日と同じ二月十五日に自らの死を願う次の有名な歌が配列さ

れる。

願はくは花のしたにて春死なんその如月の望月の頃〔七七〕

なぜこの歌は、この位置に並び得たのだろうか。執着の心と

往生の願いと、どのように繋がるのだろうか。

「願はくは」詠については、松野陽一氏が「永遠なる美の世

界―象徴としての月と花と―に自己を合一せしめんとする願

いが、同時に仏者としての宗教的な到達点でもあり得るとい

あらまほしき臨終」と解説し、山田昭全氏が「花・月は、西行が日本の国土で見た桜や月であるはずだが、同時に釈迦入涅槃時の沙羅双樹と月との象徴でもあろう」と指摘し、西澤美仁氏が「和歌の教奇を仏教の往生に結びつけようという、生涯を懸けた執念の論理が模索され続け、〈略〉月の美も花の美も、金色に莊嚴された極楽世界に転位されることで、この世にはない美の極致が幻想される」と言及する³⁾。

このように「願はくは」詠には、前歌七六番歌の桜に染まる、仏教が忌避すべき執着の心を否定するのではなく、他の道を探すかのような西行の立場が見えてくる。おそらくは「願はくは」詠におよぶ心の歷程を示すのが六二〜七六番歌なのであろう。そもそも歌群冒頭の六二番歌において「心」という言葉が使われることから、この歌群の主題の一つは花と心との関係を示すことにあるだろう。また、そのうち六六〜六九番歌に「心」を詠み込んだ歌が四首も並べられていることは何かしらの意図があるものと考えられる。すなわち、六二〜七七番歌の表現を分析することは、西行における仏教と和歌との関係を明らかにすることにも繋がるだろう。

また、『山家集』は段階的に成立したことが研究史のなかで論じられてきた。本稿が考察対象とする掲出箇所については「撰

集のやうなる物」(『長秋詠藻』雑・四〇一詞書、『三五代集』をさす。七番目の勅撰和歌集『千載和歌集』の前身と推定される)の編纂資料として、西行によって撰者藤原俊成(1144-1204)に提出された段階の「山家集」(1〜9三四部分⁴⁾)に入っていたと推定されるが、寺澤行忠氏によれば七〇〜八四の十五首は「ある段階で後補されたものであろう」という。本稿で重視する七六・七七番歌はその後補部分にあたるが、俊成提出「山家集」を増補し千三百首段階(1〜1369)となった「山家集」から西行が自詠三六〇首を抽出し編纂した『山家心中集』には収録されている。そのため、この箇所の配列意図を考えることは、俊成への「山家集」提出時(仁安元年[1167]一月以前⁵⁾)から『山家心中集』成立時(仁安三年[1188]—安元元年[1175])までに西行が到達した和歌観を考えることにもなるだろう。

本稿では、「花の歌あまた詠みけるに」歌群のうち六二〜七六番歌の「心」と「花」の表現を考察することで、西行五十年代には成立していた和歌観、すなわち歌道と仏道の共振について述べていく。

二、「思ひやる心」から「染む心」へ

— 花への思いの深まりと執着 —

当該歌群六二～七六番歌で「心」と花を詠み込んだ歌は、三つに分けることが出来る。a. 六二・六三番歌の二首、b. 六六～六九番歌の四首、c. 七六番歌の一首である（「心地」については、「心」と別の言葉として扱う）。

まず a から見ていこう。

吉野山雲をはかりに尋ねいりて心にかけてし花を見るかな

〔六二〕

六二番歌は、雲の様子を目処に吉野山を尋ね分け入りて「心」に氣に掛けていた花を見たことを詠んでいる。「はかり」は、和歌には用例が少なく、そのため散文作品を見てみると、『伊勢物語』二十一段において女に去られた男が「いづかたに求めゆかむと、門にいでて、と見かう見、見けれど、いづこをはかりともおほえざりければ」と女の行方に見当がつかない場面が使われているように、目当て・目処・見当の意味を持つ。漢字

をあてるならば「計り・量り・秤」であり、四句目の「かけ」と縁語になっている。散文的表現を和歌に取り入れるのが、西行らしい破格な詠みぶりであるが、その一方でこの歌は和歌の伝統的表現も踏まえている。それは、なぜ雲が吉野山の花の見当になるかの理由とも関わる。

最初の勅撰和歌集『古今和歌集』仮名序には「春の朝吉野の山のさくらは人磨が心には雲かとのみなむおほえける」と、現存最古の歌集『万葉集』を代表する歌人柿本人麻呂の「心」には吉野山に咲く桜がまるで雲かとばかり思われるのだという記述があり、ここに吉野山の桜と雲との見立てが成立している。西行は、この伝統的な捉え方を踏まえて、雲を目処に桜を尋ね入るのである。西行という歌人の特色としてその破格な表現に目が向きがちなのであるが、西行は和歌の伝統を意識した歌人でもあった。たとえば、次の歌がその良い例であろう。

津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり

〔『新古今集』冬・六二五「題しらず」〕

春と冬の対比のなかで冬の寂しさが強調される歌である。上二句で津の国（摂津国。現大阪府北部・兵庫県東部にあたる）

の「難波の春」が示されたあとそれは夢だったのだなといい、そしてその夢から覚めたあとの下三句において、蘆の枯れ葉の音を鳴らしながら吹き渡る風の音が聞こえたと詠う。もしかしたら、この冬の音こそが夢を破った原因かもしれない。上句と下句で、春と冬、夢と現実とがあざやかに対比させられているが、更にここには古と今との対比もなされている。これには本歌がある。

正月ばかりに津の国に侍りけるころ人のもとに言ひ遣

はしける

心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを

〔後拾遺集〕春上・四三／能因

西行に先行する旅の歌僧能因〔888-没年未詳〕の歌である。和歌の情緒を解する心を持つ人に是非この津の国の難波の素晴らしい景色を見せたいものです、と詠んだ歌であり、西行はこの能因の歌に答えているのである。能因が求めていた「心あらむ人」それは自分である。そして、同じ景色を自分は見ている。しかし、それは儂い夢であった。上二句は能因の古、下三句は西行の今という対比になっているのである。憧れである古の歌

僧能因とのひとときの出会い、しかし、現実には葦は枯れ、そこには寒い風が吹き渡る。なんとも言えない寂しさ、荒涼感がここでは表現されている。

では、なぜこの歌が和歌の伝統を意識していると言えるのか。それを論じるため、更に歌を紹介したい。

霜枯れのこやの八重葺き葺きかへて葦の若葉に春風ぞ吹く

〔秋篠月清集〕院初度百首（正治初度百首）

春廿首・七〇七

『新古今和歌集』仮名序を執筆した藤原良経〔1169-1206〕の歌である。霜枯れていた小屋の八重葺きの屋根を新しく葺き替え、そして葦の若葉には春風が吹いている様子が詠まれている。この歌については、「津の国のこやとも人をいふべきに暇こそなけれ蘆の八重葺き」〔後拾遺集〕恋二・六九一／和泉式部〕が参考になっているが、同時に西行の歌も意識しているのはなからうか。すなわち、「こや」は「小屋」であると同時に摂津国の「昆陽」を示すことから、良経詠も西行詠と同様に摂津国を歌の舞台としており、西行の「蘆の枯葉」に対し「蘆の若葉」に、冬の「風」ではなく「春風」が吹いているという対応

関係になつてゐることが見えてくる。そして、能因・西行詠にこの良経詠を並べると、共通して〈難波の春〉の情景が詠み込まれていることに気づかされる。では、何故この三人は〈難波の春〉を詠んでいるのだろうか。和歌で〈難波の春〉といえ、次の歌が思い出されるだろう。

難波津なにはづに咲くやこの花冬ふゆごもり今は春はるべと咲くやこの花はな

〔古今集〕 仮名序

『古今集』仮名序に見られるこの歌は、王仁わにが大鷦鷯おほあざののみこ帝みかど（仁徳天皇）の即位を言祝ぐ歌であり、仮名序では「歌の父母」の一首とも言われる。能因詠の「心あらむ」を和歌の情緒を解する心と解釈しえるのは、この歌によるからである。

この『古今集』仮名序でも取りあげられる難波津の風景を能因・西行・良経が同じく見るといふことは、『古今集』から続く和歌の心、伝統というものを三人ともに受け継いでいるといふことの確認でもあった。そして、良経はのちに『新古今集』の仮名序を書くこととなる。

このように西行が和歌の伝統を意識していることをふまえ、六二番歌の「はかり」といふ言葉との関連を考えると、桜を見

るとき『古今集』仮名序に示される和歌の「心」（ここではその心を代表する歌聖「人麿が心」を目処・基準にするのだという意志も示すこととなるだろう。また、このように和歌の伝統に則りつつも和歌では用いてこなかった「はかり」という散文的な言葉を用いるところに、西行が和歌の伝統と逸脱をあわせ詠む立場が見えてくる。

次の六三番歌では、心がどのように桜と関わっていくかが具体的に詠まれていく。

思ひやる心や花に行かざらん霞かすみこめたるみ吉野の山よしののやま（二六三）

吉野山の霞の奥にある桜を思いを馳せると心が晴れ晴れとしないことはないといふ詠んだ歌である。「思ひやる」は、思いを馳せるの意で、『古今集』から用いられている（『万葉集』における「思ひやる」は気を晴らすの意で用いられている）。たとえば、北国にいる人に送った紀貫之「生年未詳一946頃」の歌「思ひやる越こしの白山しらねしらねども一夜も夢に越えぬ夜よぞなき」〔古今集〕雑下・九八〇「越こしなりける人に遣つかはしける」。『拾遺集』にも入集〕では、あなたのいる北国にある白山を私は知らないけれども夢のなかではその見たこともない白山を越えない日がないほ

どに貴方に思いを馳せています、と詠んでいる。この貫之詠であるが、歌だけを見ると遠く離れた恋人に対して詠ったようにも見える。同じく『古今集』で「思ひやる」と「夢」を併せ詠んだ「思ひやる境はるかになりやする惑ふ夢路に逢ふ人のなき」〔『古今集』恋一・五二四／読人しらず「題しらず」〕は、思いを馳せる土地の範囲が遙か遠くにまで広がりが過ぎてしまったのか、私がさまざま夢路に逢う人がいないのです、という恋歌であることから貫之詠も恋歌のように見えるが、雑下の部立に配列されていることから実際は恋人ではなく知り合い・友人に対しての歌であることがわかる。では、貫之詠に恋歌的表現が含まれていることはどのように捉えればよいのだろうか。それは、知り合い・友人に対する思いを述べるために恋歌的表現を応用したということであろう。こういった応用の融通無碍さは貫之と同じく『古今集』の撰者である凡河内躬恒「生没年未詳」の歌からも首肯される。

師走ばかりに、大和へ事につきてまかりけるほどに、
宿りて侍りける人の家の娘を思ひかけて侍りけれど、
やむごとなきことによりて罷り上りにけり、明くる
春、親のもとに遣はしける
みつね

春日野に生ふる若菜を見てしより心を常に思ひやるかな

〔後撰集〕春上・二二二

春の部立に入っているため、若菜に思いを馳せるさまが詠まれていると表面的には捉えられるが、詞書を見るとそこに重ねられている他の思いも読み取れる。十二月頃に大和国へある仕事で訪れた躬恒は、宿とした家の娘に懸想したが、避けることの出来ない用事のために京へ戻り、翌年の春に親のもとへ送った歌であることが詞書で明かされていることから、この歌における大和国の春日野でみつけた若菜とは娘を指し、娘にいつも思いを馳せているのだという恋の思いの含まれていることが理解できる。ここでは、四季歌と恋歌が融通無碍に重なり合っており、躬恒詠は恋歌とも読み取れる。ただし、「娘に懸想する形をかりての、家主への挨拶か」（和泉叢書）とも、また「春日野の雪間を分けて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも」（『古今集』恋一・四七八／壬生忠岑）と「競作した虚構の作であるとも考えられる」（岩波新大系）とも指摘され、実質は四季歌とも恋歌とも雑歌とも決めがたい歌ではある。しかしながら、これら『古今集』撰者たちの歌からは、「思ひやる」が恋歌的表現を基本としつつも、恋以外にも応用できる歌語で

あることが理解できよう。

以上をふまえた上で更に西行以前の「思ひやる」の表現史を
確認しておく。特に「思ひやる心」という表現が勅撰集にお
いてどのように用いられているかに絞って見ていきたい。西行
詠六三番歌と同様に桜を詠んだ歌に以下の歌がある。

後冷泉院御時、上の男（をのこ）も花見（はなみ）にまかりて歌など詠み、
高倉（たかくら）の（たか）一宮（いのみや）の御方（みかた）に持て参りて侍りけるに 一宮駿河
思（おも）ひやる心（こころ）ばかりは桜花（さくらばな）たづぬる人に遅れやはする

〔『後拾遺集』春上・八六〕

祐子内親王 [1038-1105]（高倉の一宮）に仕えた女房の駿
河「生没年未詳」が内親王のもとに届いた歌に対して、花見に
は同道できませんでしたが花に思いを馳せる心だけは花を尋ね
た皆様に遅れは取っていません、と桜への思いの深さを詠んで
返した歌である。ここで注目したいのは「心ばかりは」という
表現である。岩波新大系が「身」は赴かなかつたが、「心」だ
けは」と解説しているように、「心」と「身」を別のものとし
て表現することで、その「思ひやる」対象への深い思いを強調
して述べていることは重要であろう。また、西行がよく詠んだ

月についても「思ひやる心」とともに詠まれた先行例がある。

月を待つ心（こころ）を詠める
大江嘉言
秋（あき）の夜（よ）の月（つき）まちなかねて思（おも）ひやる心（こころ）いくたび山（やま）を越（こ）ゆらむ
〔『詞花集』秋・一〇四〕

月を待ちかね、月に思いを馳せる心は何度も山を越えたこと
でしよう、と詠んでいる。この歌において「思ひやる」は「想
像するの意だが、『思ひを遣る』と解して、『思ひ』が山を越え
て月の方に飛んで行くととりな」すことも可能であり（岩波新
大系）、それは「月の出を求めて、心のみ東の方に山越えする
としたのが趣向」（和歌大系）を実現するための表現である。
そして、それは「心と月とを客体化し擬人化して月を恋う歌と
して構成」（和泉叢書）したからこそ可能であった。先に見た
一宮駿河の歌についても同様に「心」が擬人化されており、「花」
の「方に飛んでゆく」と解釈し得るだろう。「思ひやる心」は
思いを馳せる、想像する意とともに対象に具体的に向かってい
く様をも示す強調表現となつてることがわかるのである。他
の西行以前の勅撰集における「思ひやる心」も確認してみよう。

①思ひやる心は常に通へども相坂の関越えずもあるかな

〔後撰集〕恋一・五一六／三統公忠「題しらず」

②思ひやる心にたぐふ身なりせば一日に千度君はみてまし

〔後撰集〕恋二・六七八／大江千古「題しらず」

③思ひやる心ばかりは障らじを何隔つらん峰の白雲

〔後撰集〕離別羈旅・一三〇六／橘直幹「遠くま

かりける人に餞し侍りける所にて」

④おもひやる心の空にゆき帰りおほつかなさを語らましかば

〔後拾遺集〕恋三・七三二／藤原通俊「遠き所に侍

ける女に遣はしける」

⑤夜な夜なは目のみ覚めつつ思ひやる心や行きておどろかす

らん 〔後拾遺集〕恋四・七八五／道命法師「題不知」

⑥思ひやる心さへこそ寂しけれ大原山の秋の夕暮

〔後拾遺集〕雑三・一〇三八／藤原国房「良暹法師

の許に遣しける」

⑦思ひやる心さへこそ苦しけれ有乳の山の冬のけしきは

〔金葉集二度本〕雑上・五九七／親「返し」(越中

国にいる娘の歌に対する都の親の返歌)。三奏本に

も入集」

以上、七首をあげたが、そのうち四首の部立が恋である。恋

歌以外について先に確認すると、③『後撰集』離別羈旅の橘直

幹詠、⑥『後拾遺集』雑三の藤原国房詠、⑦『金葉集二度本』

雑上の親詠は、遠く離れる友人間や親子間の情を詠んだもので

あり、先の貫之詠でも述べたとおり恋歌の表現を応用して対象

に対する思いの深さを表現したものであろう。恋歌についても

見ていくと、①②が恋の相手に対して思いを馳せる心を擬人化

し、あたかも恋人に向かつていくかのように心を詠んでいく。

①は「心は常に通へども」と心が実体をともなって恋人のもと

を訪れるかのように詠み、②はそういつたいつも恋人のもとへ

通っている心に身が連れだつて行つたならば私はあなたに一日

に千度も逢うことになるでしょう、と恋の思いの強さを強調し

て詠む。相手に対する強い思いを持つゆえに、恋人のもとをい

つも訪れる人かのように「思ひやる心」は擬人化され表現され

るのであり、またその心の擬人化は人々の願望でもあった。だ

からこそ、④では本当に心が実際に空を飛び、遠くに住む恋す

る貴方と逢つてこのもどかしさを語り逢えたらいいのに、と詠

むのである。また、⑤のように毎夜眠ることなく思いを馳せる

私の心はそちらに向かい安眠しているあなたの眠りを覚まさせ

ているでしょうか、と私のほうがあなたよりも強く恋慕慕つて

いるのだという相手へのアピールにもなり得るのである。⁹⁾

西行詠六三番歌には、こういった対象に強く思いを馳せ、さらには実体化するかのような強調表現「思ひやる心」が詠み込まれているのである。また、この六三番歌に関しては、「この奥に花があると想像すると心に必ず花が咲き、その幻の花に満足して気は晴れる」(和歌大系)と「や」を反語とする解釈もあるが、「思ひやる」という歌語があることによって、「や」を詠嘆ととり「思いやる心が花にまでとどかないのか、吉野山には霞が立ちこめていて、花を眺めるすべもない」(岩波大系)とまず解釈するのが妥当であろう。その上で西行は「思ひやる心」が満たされず更に花を求めていくことで、想像の花さえも求めてしまうのである。では、こういった「思ひやる心」に至りつく先は何であろうか。それはc. 七六番歌の「花に染む心」であろう。

花に染む心のいかで残りけん捨て果ててきと思ふ我が身に
(七六)

花に執着する心がどうして残ってしまったのでしょうか、そういう心は捨て去ったと思っていた出家の我が身なのに、と

悟られぬ自らを省みる歌である。このような花に心が染まる状態を詠んだものとして、まずは『古今和歌集』の歌を紹介したい。

題しらず よみ人しらず
心ざし^か深く染めて^そし居りければ消えあへぬ雪の花と見ゆら
む(春上・七)

ある人の曰く、前太政大臣の歌なり

この歌の「心ざし」については、岩波新大系が『古今集』仮名序冒頭「やまとうたは人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」に影響を与えた『毛詩正義』周南の「情動於中。還是在心為志」¹⁰⁾を引用し「情が動いて、そのまま心の中に留まるの言う」と指摘した上で、「歌語としては珍しい」「こころざし」と直截に飾らずにのみ出した上句が、春への期待を強く示す」と言及する。そして、「春をあこがれる強い思いに、心を深く染め通したので、春が来ても消え残っている雪が花に見えたのだらう」と現代語訳するように、花に染まる心とは心のなかにその強い思いが留まることをいう。また、片桐洋一氏は「みずからの心が春を待望し、花を希求するがゆえに、消え

残っている春雪を花であるかのように錯覚してしまうというこの歌の場合は、『心に思ふこと』が眼前にある景物（この場合は「雪」よりも優先することを明白に示していることにおいて、まさしく『古今集』的詠法の典型をなしているのである）と指摘する。これは先に見た西行詠六三番歌が心に思う桜が霞よりも優先し表れてくることも通底する。

また、同じく『古今集』恋部には「紅のはつ花染めの色ふかく思ひし心我忘れめや」〔恋四・七二三／よみ人しらず「題しらず」〕の歌があり、深く相手を思ったことを初咲きの紅花で染めた色が深いことに喩えて詠んでおり、その花の色そのものとなってしまうかのような心が詠まれている。この歌の数首あとに「色もなき心を人に染めしよりうつろはむとは思ほえなくに」〔恋四・七二九／紀貫之「題知らず」〕と相手に染まった（あなた色に染まった）心が褪せるとは思わなかったという歌があることも興味深い。結果的には「世中の人の心は花染めのうつろひやすき色にぞありける」〔古今集』恋五・七九七／よみ人しらず「題しらず」〕と詠われるように色褪せてしまうのだが、染まった当初は褪せることがないと思っていたのである。

おそらく西行も出家すればこの花に染まった心の色もいずれは色褪せるだろうと考えていたのであるが、それは褪せるこ

となく「心ざし深く染まり、消えることがなかった。これは「心が花に染まるほどの愛染頓着」（岩波新大系『山家心中集』）であり、仏教の忌避する執着の心である。『治承三十六人歌合』〔二七一〕の詞書に「出家の後、花見ありきて詠みける」とあるように出家後すぐに詠まれたこの歌で、西行は「桜の花の美しさに憑かれる心が、修行に向かう意志の妨げとなつて残っている」ことを自覚する。そして、その深い執着があるからこそ、深く往生を願う「願はくは」詠を次の歌として並べるのである。と書きつつも、やはり花への執着から往生へは飛躍がある。また、前節で確認したように、花の美と往生の美とは「願はくは」詠で重ねられている。では、それはなぜ重ねられ得るのであるうか。そのことを考えるために、b. 六六～六九番歌の四首を見ていきたい。

三、詠歌と観想 — 歌道と仏道との共振 —

吉野山梢の花を見し日より心は身にもそはず成りにき

〔六六〕

あくがるる心はさても山桜散りなんのちや身に帰るべき

〔六七〕

花見ればその謂れとはなけれども心のうちぞ苦しかりける

〔六八〕

白川の梢を見てぞ慰むる吉野の山に通ふ心を〔六九〕

まず六六番歌では、花を見た日から「心」が「身」に添わなくなつた、つまりは「心」が浮かれ出てしまつたということ詠む。それを受けて次の六七番歌では、その花により憧れ出た

「心」は桜が散つた後に身に戻ってくるだろうかと思ひ出た。六六・六七番歌が対応関係となつてゐる。そして、六八番歌では、理由は何かわからないが花を見ると心が苦しいのだと述べ、六九番歌ではその吉野の山に「通ふ心」を慰めるために京・白川の桜の梢を見るのだという。

六八番歌を除く六六・六七・六八番歌については、「思ひやる心」の歌と同様に「心」が擬人化されている。また、これら三首については、遊離魂であるという指摘がある。たとえば、「昔の人は靈魂は肉体より遊離して『あくがれいづるもの』と考えた」(古典集成)、「花に恋う遊離魂の態度」(岩波新大系)、「遊離魂の花への転用。恋歌的表現」(和歌大系)、「心は花にあらがれ出て、身に添わなくなつてしまつた。次歌と共に遊離魂現象は恋の物思いに通有」(角川ソフィア文庫。以上六六番歌)。

「花に惹かれて遊離する魂」(和歌大系・六七番歌)、「花への愛着が高じたために『通う心』が身から遊離するのを、懸命に紛らそうとする」(和歌大系・六九番歌)という言葉がある。西行以前の和歌にも遊離魂は詠われており、たとえば次の『伊勢物語』『源氏物語』の歌や、古典集成が指摘する和泉式部「生没年未詳」の歌などが見られる。

思ひあまり出でにし魂のあるならむ夜ぶかく見えば魂むす
びせよ 〔伊勢物語〕百十段・一八九／男

歎きわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたかひの棲

もの思へば沢の螢も我身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る
〔後拾遺集〕神祇・一一六二／和泉式部「男に忘

られて侍けるころ貴船に参りて御手洗川に螢の飛び
侍けるをみて詠める」

遊離魂を詠んだこれらの歌には、「魂」という言葉が詠み込まれてゐるのに対し、六六・六七・六九番歌については「魂」の語がない。もちろん西行詠の「心」も遊離魂にまで発展し得る、もしくは匹敵する状態ではあるが、ここで「魂」ではなく「心」

という言葉を使っていることに拘りたい。西行の場合、『伊勢物語』や『源氏物語』の歌に見られるような古代的または民俗的な遊離魂ではない。また、和泉式部詠のように遊離魂が「蜃」に化身して外界に具現化したと錯覚するありかたとは違い、何かに心が化身して外界に目に見える形になるわけでもない。和歌大系が指摘するように、西行は他にも「さまざまにあはれ多かる別れかな心を君が宿にとどめて」〔『山家集』雑・九二七〕、「かへれども人の情けにしたはれて心は身にもそはずなりぬる」〔同九二八〕のように心が遊離するような歌を残しているが、これは「思ひやる心」の延長線上にある表現であろう。すなわち、西行の内界の心象風景として表れてくる遊離する心なのである。そして、その心の動きを見つめる六六・六七番歌と六九番歌にはさまれることによって、六八番歌では「心のうち」の「苦し」さが発見されていく。

その「苦し」さが発見される六八番歌については、まず「その謂れとはなけれども」の表現に注目したい。ここで用いられる「謂れ」は因縁、理由、由来などを意味する言葉であるが、和歌の先行例がない。そのため、意味の類似した言葉を詠み込んだ歌として『山家集』秋部の連続した三首を次に取り上げ参考にした。

おぼつかな秋はいかなる故のあればすずろにもの悲しかるらん
〔秋・二九〇〕

何事をいかに思ふとなけれども袂かわかぬ秋の夕暮
〔秋・二九一〕

何となくもの悲しくぞ見えわたる鳥羽田のおもの秋の夕暮
〔秋・二九二〕

二九〇番歌は、秋になるとどうい理由があつて何か悲しくなってしまうのかはつきりわからない、と詠む。次の二九一番歌では、上句で何かをどう思うというわけでないけれどと詠んだあと、三句目を六八番歌と同様「なけれども」と逆接でつなぎ、下句でなぜか袂が涙で濡れ乾かないと理由が特定されない秋の夕べの感情を詠み込む。二九二番歌は、鳥羽の稲田に行き渡った秋の夕暮れは「何となく」もの悲しく見えると詠んでいる。二九一・二九二番歌の二首は、同じく「秋の夕暮」と体言止めで終えている「さびしさに宿をたち出でて眺むればいづくも同じ秋の夕暮」〔後拾遺集〕秋上・三三三／良暹「題不知」の歌を参考で作られたものであり、良暹詠の秋の夕暮れの寂しさが前提となっている。これら三首では、ある意味あたり前の感覚である秋の悲しさをあえて問い、その悲しさの理由がわか

らないと言ふことによつて、秋の悲しさが本源的なものであるかのように感じさせる歌となつてゐる。

以上のことから六八番歌は「その謂れとはなければども」といふ言葉で苦しみの理由を特定せずに示すことで、その苦しみが本源的であるかのように感じさせることに成功している。その苦しみは、歌の配列から見れば、遊離魂に匹敵するほどの花に執着する心がもととなつてゐることは確かである。花に執着する心の苦しきは、秋の悲しさと同じ本源的なものとして西行和歌には詠まれるのである。ただし、遊離魂の状態は、『源氏物語』ではものけになるほどの思いの強さから生じ、和泉式部詠では「もの思へば」と思い悩んでゐると詠むように、必ずしも肯定されるあり方ではなく、それに匹敵する「花に染む心」(七六)もまた仏教的に忌避されるあり方である。

では、こういった苦しみの発見はどうして可能だったのだろうか。これらの背景には何があるのだろうか。そして、なぜ苦しさを主題としなくてはならなかったのか。それは苦しさが発見される「心のうち」といふ言葉にヒントが隠されてゐるだろう。次に西行が「心のうち」と詠んだ『山家集』の他の歌を並べてみた。

⑨ 我が歎く心のうちの苦しきも何にたとへて君に知られん

〔雑・恋百十首・一二五三〕

⑩ 君慕ふ心のうちは稚児めきて涙脆くもなる我が身かな

〔雑・恋百十首・一三二一〕

⑪ 歎かるる心のうちの苦しさを人の知らばや君に語らん

〔雑・恋百十首・一三三〇〕

⑫ 世を捨てぬ心のうちに闇こめて迷はんことは君ひとりか

〔雑・七三九「返し」〕

⑬ 鳥辺野を心のうちに分け行けば伊吹の露に袖ぞそぼつる

〔雑・七五七「題知らず」〕

⑭ 闇晴れて心のそらにすむ月は西の山辺や近くなるらん

〔雑・八七六「観心」〕

⑮ 待ちつけて嬉しかるらん七夕の心のうちぞ空に知らるる

〔秋・二六二「七夕」〕

⑭は「心のそら」と詠んでゐるが、『西行上人集』雑・三八九番歌において第二句「心のうちに」とすることから参考として並べた。

⑨⑩⑪は恋百十首に並べられた恋歌である。⑨はあなたを恋慕つて歎く私の「心のうちの苦しき」を何に喩えたらわかっ

て貰えるでしょうか、と喩えようのないほどの苦しさを、⑩は自然と歎いてしまう私の「心のうちの苦しき」を他人が知ればその激しさに恋の相手に伝えたくなくなるほどに見えるという苦しさを、⑪は恋い慕うあなたを思う「心のうち」は子どものように幼くなり涙もろくなる私なのです、と君がために幼な子のように心の制御が出来ず涙を流すほどの恋の苦しさを詠んでいる。⑫は「涙もろや」と詠んだ「弓張の尽きせぬ恋をいかがせん涙もろやと人はいへども」〔久安百首〕恋甘首・一二七七／待賢門院堀河」とあわせ考えると、他人から見れば極端な「心のうち」と映じるだろう。どれも恋情の極端さを詠むが、「心のうち」の用法としては平明な用いられ方である。

それに対して⑫⑬⑭は、⑫が「ある人、様変へて仁和寺の奥なるところに住む」と出家したある人との一連の贈答歌のなかの返歌の一首であり「闇こめて迷はん」と悟りにいたらない迷いの状況を詠み、⑬が死の意識される火葬場・墓地のある「鳥辺野」を詠み、⑭が詞書に「観心」とあることから、どれも内容に仏教的な要素が認められる。⑬「鳥辺野を心のうちに分け行けば」は「心中に死の世界を思つて」（角川ソフィア文庫）分け行く、すなわち西行の心象風景として鳥辺野が詠まれている。同様に⑭も西行の心象風景として「心のそら（うち）」で

月が西へ傾いていく様子が詠まれている。「心のうち」とは⑫のように煩惱を生み出す無明長夜の闇に閉ざされることもあるが、⑭においてはその闇のなかに悟りの象徴である「月」が浮かび、西、すなわち西方浄土へ向かっていく。さて、この西行の心象風景において悟りの実現が予期される⑭の詞書に「観心」とあることは注目すべきである。「観心」とは表面的な意義とおりに解釈すれば、心を観じる・見つめることであるが、山田昭全氏はもつと具体的に「心に月輪を澄ませるといふのは、月輪観によつて内なる月輪を認識することであろう。これを心月輪とよぶ」と指摘する^⑮。月輪観とは、「満月の月輪を対象としてそこに自らの悟りの現証を体現しようとする観法」〔岩波仏教辞典〕第三版）であり、自分の心を見つめていく修行方法である。このように、⑫は鳥辺野、⑬は無明長夜の闇、⑭はその闇夜に浮かぶ月という煩惱・悟りどちらも含めた西行の心象風景が詠まれているのであり、⑨⑩⑪の激しい恋情をも生み出す「心のうち」の風景なのである。

また、⑫⑬⑭は「心のうち」に景があるが、⑮は景に「心のうち」が顕れる。⑮は七月七日の夜、牽牛を待ち迎えた織女の「心のうち」の嬉しさを空に読み取る歌である。七夕は天上の出来事なので、その夜の空の様子が織女の心情を示すというこ

とは、今日感覚からしても何の不思議もないように感じるが、果たして当たり前なのだろうか。「七夕の心のうち」を詠んだ他の歌人の歌も見てみよう。

⑬ 逢ふほどもなくて別るる七夕は心のうちぞ空に知らるる

〔堀河百首〕秋・五八八／永縁「七夕」

⑭ 七夕の心のうちやいかならむ待ちこし今日の夕ぐれの空

〔千載集〕秋上・二三三／藤原兼実「七夕のころをよみ侍りける」

⑮ が一年ぶりに牽牛が訪れる織女の「心のうち」はどうであろうとその織女が待っている夕暮れの空をほんやりと見やるのに対し、⑬ 西行詠と下句が同じ⑭ は織女の「心のうち」を空と同一視するという違いがある。ここには織女の「心のうち」の情と「空」の景とが共振していることが読み取れる。それは⑬ を意識して詠んだであろう⑬ 西行詠でも同様であり、また⑭ も「今日の夕ぐれの空」に心を見ていくのであろう。⑮ があるからこそ成立する感覚である。このような「心のうち」を用いながら景と心が共振する歌は、他にも認められる。

⑯ 晴れずのみものぞ悲しき秋霧は心のうちに立つにやあるら

〔後拾遺集〕秋上・二九三／和泉式部「題不知」

⑰ 恋しさのながむる空に満ちぬれば月も心の中にこそすめ

〔長秋詠藻〕恋・三一七／藤原俊成「月五首歌よみし中に、月前恋と云ふことを」

⑱ 来む世には心のうち現さんあかでやみぬる月の光を

〔千載集〕雑上・一〇二三「月歌とてよめる」・西行上人集「五三七」述懐の心を」

⑲ 和泉式部の歌は、心が晴れず何となくもの悲しい思いがするのは、秋霧が外だけでなく心の中にも立っているからでしょうかと、自分の心情と景色とを重ね詠んでいく。ここで「心のうち」に霧が立つというのは、秋霧によって誘発された悲しみをあらわすための強調表現であると同時に、和泉式部の心象風景ともなっている。

次の⑲ 俊成詠は「月前恋」という題のもと詠まれた歌で、恋しい心情が眺めている空に満ちたので、その空に浮かぶ月も心の中に澄んでほしいという。ここでは、情が景と同化することで空に恋の思いが満ちるので、反対に空に浮かぶ月も「心の中(うち)」に生じて澄んだ光を宿しても良いではないかと下句

では心象風景へと向かっていく。この俊成詠について川村晃生氏は、「月輪観を意識したものか」と指摘する^⑮。また、俊成が撰者を務めた『千載集』に入集した^⑯の西行「来む世には」詠にもやはりこの月輪観が詠み込まれていることが指摘されており（岩波文庫）、こちらも心象風景として「月の光」が描かれている。この世で見飽きることなく見続けた「月の光」という景を来世では「心のうち」に映じることを願うのである。このように^⑰^⑱については、先に^⑭で見た月輪観が認められるのである、どちらも景と情との共振を願っている。また、「心のうち」という言葉は、『和漢朗詠集』に見られる都良香〔834-839〕が竹生島から琵琶湖を見渡して詠んだ詩句にも用いられている。

さんぜんせかいはまなこのまへにつきぬ
じふにいんえんはこころのうちむなし

三千世界眼前尽 十一因縁心裏空

〔和漢朗詠集〕山寺・五八三／都良香

琵琶湖の風景を見ると全世界を眼前に見尽くすようで、仏道の妨げとなる十二因縁も心の中から消えてしまいました、と詠む。上句の琵琶湖の景が下句の心（情）に映じ、景が情に同化することで、仏道の妨げが除かれていくのであろう。琵琶湖の景は良香の心象風景となっていくのである。また、『袋草紙』

上巻に「上の句は竹生島において都良香案ずるなり。下の句は思ひ得ること能はず。而して、その後の夢に弁才天これを示さるる所なり」（岩波新大系）とあるように下句が竹生島の弁才天によって与えられたとする伝承も付随するが、これは上句との対応の妙がもたらされた理由を神仏に求めるものであり、両句の対応はそれほどこの詩にとつて重要であったことを示している。景と情との共振は、悟りへも通じるからこそ神仏が登場する伝承も生まれるのである。

このように「心のうち」という歌語には仏教的思考を含みこむ余地が認められる。また、その一方で^⑨^⑩^⑪のような極端な恋の心も詠まれ、^⑲のように終いには空にまで満ち満ちていく場合もある。西行六八番歌についても「思ひやる心」から遊離魂的な心の動きにまで達していることを思えば、^⑲上句のように「わが恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれどもゆく方もなし」〔古今集〕恋一・四八八／読人しらずを応用して花に馳せる思いが空に満ちてしまうという歌を詠むなり並べるなりして、その空は私の花に染まった心のようにだと詠むことも可能であったろうが、西行はそれを選択していない。むしろそういった六七番歌までの肥大化していく「心」の動きを「心のうち」に意識し、心象風景として意識的に見つめていく。これは^⑲俊

成詠が最終的には下句で心象風景に向かつていくことと軌を一にするものであり、月輪観に似ている。六八番歌が心を見つめていくことには、仏教への志向性もあるのではなからうか。

俊成の息子藤原定家〔1162—124〕と西行との時代的共同性として観想を指摘したものに松村雄二氏の論があり、先に用例⑨⑩⑪として示した『山家集』雑・恋百十首について『恋百十首』とは、やはり西行が恋の状況に場を借りて、実質的には心の様態をとつかえひつかえ吟味して歌化していることの証左にはかならないと思われるのである。いいかえれば、恋を場面突破口としてなされた心の観想なのだと思えることができる」と観想的方法を用いて西行が和歌を詠んだことを論じている。^⑭「観想」とは、「対象に心をこらし、その姿を想い描くこと」(『岩波仏教辞典』第三版)、「対象を捉えて、その事物の真実のすがたを智慧の眼をもって見すること」(『例文仏教語大辞典』小学館)をいう。^⑮⑯の歌から西行が観想として月輪観を修していたことは確かであろうが、ここには問題がある。悟りの象徴である月輪を観じることによって煩惱から生じる悩みや苦しみを排除する志向性があるならば、ここまで見てきた歌の「心」の花への執着は否定すべきものだというのであり、それでは七七番歌「願はくは」詠には繋がついていかない。しか

しながら、西行に影響を与えたとされる新儀真言宗の興教大師覚鑿〔1095—114〕は『阿字観儀』において以下のように説く。

善悪諸法、器界国土、山河大地、沙石鳥類等の音声に至るまで、皆これ阿字法爾の陀羅尼なり。(略)また阿字は月輪の種子なり。月は字阿の光なり。月輪は阿字と阿字の光なり。月輪の光とは、心月輪の徳用をいふ。(『阿字観儀』)
 「阿」は書名・本文共に梵字で表記されている。^⑰

阿字観とは「月輪の中、蓮華の上に、悉曇文字の阿字を書いたものを本尊として掲げ、観法を行う」(『岩波仏教辞典』第三版)という月輪観の一種であり、覚鑿はこの阿字観を得意とし、阿字観に関する著作をいくつも残している。この『阿字観儀』は「覚鑿上人御母儀へこれを御勸む」とあるように覚鑿がその母に説いたものであり、ここでは「阿」とは「善悪諸法」、すなわち善悪を含むあらゆる存在・事物を示し、月を示す梵字(種子)であるという。また、「受生最初の阿と唱へ出で、それより已来阿と悦び阿と悲しみ、何に付いても阿といはざる事なし」とこの世に生を受け、産声をあげてから、悲しみも喜びも「阿」でないものはないという。「阿」とは「万物の始源」(『岩波仏

教辞典』第三版「阿吽」であり、それを見つめていくということとは、善悪を本源的に見つめていくということである。ただし、観想においてこのように善悪をみつめていくのは、ただ月輪観・阿字観のみではない。天台宗における観想の実践方法を説いた書である『摩訶止観』にも次のように説く。

もし人、性として貪欲多く、穢濁熾盛にして、対治し折付すといえどもいよいよさらに増劇せば、ただ趣向を恣にせよ。なにももつての故ぞ、蔽もし起らずんば観を修することを得ざればなり。(『摩訶止観』卷二下)

末本文美士氏によれば「煩惱を捨てるのではなく、それをほしいままにさせて観察の対象にせよ」という内容であり、「花に染む心」を見つめていく立場と通底している。この『摩訶止観』は、歌人たちの意識・無意識に関わらず深く影響を与えていたものと考えられ、西行にもそれが例外でないことは次の『山家集』の歌からも察せられよう。

寂超入道談義すと聞きて遣はしける
弘むらん法には逢はぬ身なりとも名を聞く数に入らざらめ

やは
〔雑・八五六〕

返し
伝へ聞く流れなりとも法の水汲む人からや深くなるらん
〔雑・八五七〕

この贈答歌は、西行が大原にて談義を行うと聞いて寂超「永久年間(二一三—二一八頃)に遣わした歌とそれに対する寂超の返歌で、ここでいう談義とは『西行上人集』の詞書に「寂超入道、大原にて止観の談義すと聞きて、遣しける」(雑・三八四)とあることから、『摩訶止観』についての談義であることがわかる。西行はその止観の談義に参加しないが、必ずしも西行が止観を学ぶことを拒否したとは断定できず、むしろ身近に『摩訶止観』が存在していたことを示すだろう。西行の仏教信仰については様々な説があり、特定しがたいところがあるが、本稿ではこの『摩訶止観』も含めて観想との関係を見ていきたい。

まず、止観、すなわち〈止〉と〈観〉とは何かを確認しよう。『摩訶止観』は、天台智顛が真理の体得について講説したものを弟子の章安灌頂が聴記し、後に整理・修治を加えて完成させた書で、実践修行の具体的な方法〈止観〉について詳述

する。「止は心の動揺をとどめて、本源の真理を住することを意味し、観は不動の心が智慧の働きとなつて事物を真理に即して正しく観察することを意味する」という。「摩訶止観」の本文に即して見てみよう。

〈止〉と〈観〉はどちらも必要なものだが、『摩訶止観』十卷(上下に分けて二十卷)のうち「正修止観(正しく止観を修すこと)」「卷五上(卷十下)を説く最初の卷五上末尾には〈止〉〈観〉片方のみを教える禪師たちが登場する。

一種の禪師は、観をなすことを許さず、ただ専ら止を用い、偈を引いていわく、「思い思いて徒らにみずから思い、思い思いて徒らにみずから苦しむ。思を息むるはずなわちこれ道なり、思あればいつに観ず」と。また一の禪師は、止をなすことを許さず、専ら観に在り、偈を引いていわく、「止め止めて徒らにみずから止む。昏闇にして所以なし。止を止むるはずなわちこれ道なり。観を観ずれば理に会することを得」と。

〔摩訶止観〕卷五上

まず、〈観〉を行うことは許さず、ただひたすら〈止〉を用いさせる禪師が登場する。〈観〉は、思い重ねてむやみやたら

に思い込み、「思い思いて徒らにみずから苦しむ」から、〈止〉のみを用いるべきだという。これは六八番歌の深い思いを重ねることでもわけもわからず無闇やたらに「苦しむ」心の動きと類似する。それに対するかのように次に、〈止〉を行うことを許さずにひたすらに〈観〉を用いさせる禪師が登場する。むやみやたらに〈止〉を行ってしまうと、薄暗くはつきりしない昏闇の状態(用例⑫のような状態)に陥るから〈観〉を用いるべきだという。ここでは、片一方のみを行う過ちを二人の禪師を登場させることで説明している。

では、六八番歌のように〈観〉がすすんだときには、どのように対処すれば良いのだろうか。もちろん、その答えは〈止〉である。

時に馳覚して一念住しがたくんば、すなわちまさに止を聴いてもつて散心を治むべし。

〔摩訶止観〕卷五上

六六番歌が「馳覚して一念住しがた」い状態であり、六七番歌が「止を聴いてもつて散心を治むべし」という状態と類似する。そして、六九番歌では「馳覚して」「吉野の山に通ふ」「散心」を白川の桜の「梢を見て」「治む」のである。

このように観想における「苦しみ」は悟りに至る途中経過であり、「花の歌あまた詠みけるに」歌群六二～七七番歌における心の過程と類似している。すなわち、一念が一箇所にとどまらず「思い思いて徒らにみずから苦しむ苦しむ」(観)の様は六六・六八番歌に、その「散心治む」(止)の様は六七・六九番歌と類似するのであり、詠歌と観想とが共振している。

以上のように、六八番歌が肥大化していく「心」を「心のうち」に意識的に見つめていく立場を取るとは、こういった観想によるところが大きい。ただし、観想のみによって「心のうち」をみつめる西行の立場が作られたわけではない。なぜなら、西行が女房文学から受け継いだ内省的な詠みぶりとも軌を一にするからである。鈴木日出男氏は女歌について「もとより女の歌は、男への返歌として、男の贈歌を何らかのかたちで切り返す発想を伝統的に含んでいる。そして、しばしばその否定的な発想が自分自身に向けられ、おのずと反省的、内省的な発想をとりこむことがある。ここでも、自らの恋を内省的に捉えている」というように反省的・内省的な立場をとることがあるとする。西行が「心のうち」を見つめるのは、こういった女歌からの流れも背景にあるのであろう。^⑮和泉式部詠が「心のうち」に心象風景を詠んでいることからそれは首肯できる。

このように西行における歌道と仏道は軌を一にする。そして、軌を一にし共振するからこそ、七七番歌「願はくは」詠の歌道仏道ともに成就する願いへと結実するのである。

四、おわりに

本稿では『山家集』に見られる歌群「花の歌あまた詠みけるに」(春・六二～八六)二十五首のうち六二～七七番歌の「心」が詠み込まれている歌を中心に考察し、花に思いを馳せ染まっっていく「心」の過程を詠んでいくなかで顕れる「苦しさ」とは、自分の心を観想することによって発見される心のあり方と通底することを指摘した。月輪観・阿字観や止観のような観想の場合、必ずしも悟りのみではなく煩惱をみつめていく課程も含まれていくのであり、それは「思ひ」やり「花に染む」「心のうちの苦しさ」を発見していく詠歌と矛盾しない。だからこそ歌道仏道ともに成就することを願う「願はくは」詠(七七)は六二～七六番歌のあとに配列することが可能だったのである。歌道と仏道とが共振していく西行五十代の和歌観が、ここには認められる。

さて、この西行の「心のうちの苦しさ」を見つめる態度であ

るが、最晩年にまでその態度は及んでいたようである。西行がその最晩年にその生涯に詠んだ歌から秀歌を撰び、伊勢の外宮に奉納した『宮河歌合』九番左には次の歌が収められている。

世の中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかも
せん (一七)

『宮河歌合』の判者を務めた藤原定家は、この歌について「作者の心ふかくなやませる所侍」という判詞をつけたが、それに對し西行は「贈定家卿文」(新編全集)に次のように書く。

この御判にとりて、九番の左の、我が身をさてもといふ歌の判の御詞に、作者の心ふかくなやませる所侍れば、と書かれ候、かへすがへすもおもしろく候ふものかな。なやませると申す御ことばに、万づみなこもりてめでたく覚え候。これあたらしくいでき候ひぬる判の御ことばにてこそ候ふらめ。古はいと覚え候はねば、歌の姿に似ていひくだされたるやうに覚え候(以下略)

西行は「心ふかくなやませる」という定家の判詞を絶賛する。

死を意識した晩年の西行にとって、悩むことは避けるべきことであろう。仏教には「煩惱」という言葉もある。「煩惱」は、悟りの妨げとなる。しかし、西行の歌にとって、悩み苦しむ心は晩年においても重要であった。むしろ、「煩惱すなわち菩提なる」(『古来風躰抄』)というように、煩惱があるからこそ悟りがある。悩み苦しむことは必ずしも間違ではない。だからこそ、西行の歌は、今でも多くの人々の心に響くのである。

*和歌の引用および歌番号は新編国歌大観により、散文作品の引用は新編日本古典文学全集によった。本文は漢字をあてるなど一部の表記を変えた。
*和泉叢書は和泉古典叢書(和泉書院)、岩波大系は日本古典文学大系(岩波書店)、岩波新大系は新日本古典文学大系(岩波書店)、古典集成は新潮日本古典集成(新潮社)、新編全集は新編日本古典文学全集(小学館)、和歌大系は和歌文学大系(明治書院)の略号である。

- (1) 七〇番歌を七六番歌の次に配列する本(茨城大学附属図書館蔵本)もあるが、六九・七〇番歌と「白川」を詠んだ二首並べる『新編国歌大観』(底本・陽明文庫本)の配列に不自然さは感じられないため、こちらの配列に従う。
- (2) 白川は「何事を春の形見に思はまし今日白川の花見ざりせば」(『後拾遺集』春上・一一九/伊賀少将)と詠まれる現京都市北東部を流れる白川流域の地名で、春の形見になるとも詠まれる花の名所である。

- (3) 松野陽一『山家集（鑑賞日本古典文学）』（角川書店、1977）、山田昭全『西行の和歌と仏教』（『西行の和歌と仏教』明治書院、1987）。のちに『山田昭全著作集』第四卷に再録、西澤美仁『西行魂の旅路』（角川ソフィア文庫、2010）から引用した。ほかに西澤美仁「花のもとにて春死なん—西行和歌の本文と伝承」（『説話・伝承学』七号、1993年）、稲田利徳『西行和歌解釈覚え書』花のしたにて春死なん（『西行の和歌の世界』笠間書院、2004）等を参照した。
- (4) 宇津木言行『山家集』（角川ソフィア文庫、2018）解説、山本章博『西行の私家集—繰り返される編纂』（『日本文学研究ジャーナル』20号、2021.12）。
- (5) 寺澤行忠『山家集の校本と研究』。比較的早い時期に詠まれた歌を取録したと考えられる松屋本との比較による。
- (6) 注4に同じ。
- (7) 実際、「はかり」の詠まれた和歌は、六二番歌を踏まえたであろう藤原良経詠「しらぬやまのくもをはかりにたつねつむかしは人にあひけるものを」（『秋篠月清集』二夜百首・一五一「寄雲恋」）が管見に入るのみである。
- (8) 近藤みゆき「思ひ遣る」（『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、1990）
- (9) 「千載集」には、西行と同時代の「思ひやる心」の歌として「夜もすがら花の匂ひを思ひやる心や峰に旅寝しつらん」（『千載集』春上・五九／覚性法親王「夜思山花といへる心」を）、「おもひやる心も藤きぬほととぎす雲の幾重の外に鳴くらん」（『千載集』夏・一五六／藤原実家「遠聞郭公といへる心をよみ侍りける」）、「恋しとも又つらしとも思ひやる心いづれか先にたつらん」（『千載集』恋・二七三／源師光「題不知」）の三首が入集している。五九・七三三五番歌については「心」を擬人化し実体化させて詠んでいる。
- (10) 新編国歌大観（底本…藤原定家筆伊達家田藏本）では「折り」の表記

- であるが、解釈上「居り」に改めた。
- (11) 「毛詩正義」は「十三経注疏校勘記」によった。
- (12) 片桐洋一『古今和歌集全評釈』上巻（講談社学術文庫、2019）。原本1998）
- (13) 松野陽一『山家集（鑑賞日本古典文学）』
- (14) 寺澤行忠『山家集の校本と研究』によれば「心のうち」とする本は『山家集』にはない。また、『山家心中集』三三八番歌、『新古今集』釈教・一九七八番歌においても『山家集』同様に「心のそら」とする。一方、『西行上人集』は、寺澤行忠『西行集の校本と研究』（笠間書院、2005）によれば、伝本十六本（版本含む）のうち写本二本が「心の空」とする以外はすべて「心のうち」とする。
- (15) 山田昭全『西行釈教の典拠と釈義』（『西行の和歌と仏教』。月輪観については、ほかに山田昭全「月輪観と中世和歌」（『仏教と儀礼』国書刊行会、1987）のちに『山田昭全著作集』第三卷に再録）および『西行の和歌と仏教』の諸論文において論じられている。
- (16) 川村晃生『長秋詠藻（和歌文学大系）』（明治書院、1998）
- (17) 松村雄二『西行と定家—時代的共同性の問題—』（『論集西行』笠間書院、1990）。また、詠歌と観想、特に「摩訶止観」との関係については、三崎義泉「止観的美意識の展開」（ベリカン社、1999）が後成・定家を中心として取り上げるが、西行についてはそれほど論じていない。覚鑿の著作の訓読は宮坂有勝編注『興教大師撰述集』（山喜房佛書林）による。引用箇所と同様の記述が覚鑿「阿字観」に「生をうけて、最初に鳴き出でてよりこのかた悦ばしき事あれば、そのまま阿と咲ひ、哀しき事あれば、そのまま阿となげく。をしき物をも阿としみ、ほしき物をも阿と心をとむ。糸惜しき悪を、何事に付けても阿といはれざる事なし。善悪の諸法、器界国土、山河大地、総体能生なればなり」とある（『阿』は書名・本文共に梵字で表記されている）。

- (19) 末木文美士「荒涼たる心象の奥に——『拾遺愚草』」(『解体する言葉と世界——仏教からの挑戦——』岩波書店、1988) では、定家の歌を考察した上でこの『摩訶止観』の一句を引用し、「人間の愛欲の心の奥底に下り立ち、じっとそれを見据えようとす定家の作歌態度」は「天台の止観にこそ親しいものである」と指摘する。
- (20) 田村芳郎「天台法華の哲理」(『仏教の思想』5 絶対の真理〈天台〉』角川ソフィア文庫、1986)
- (21) 桑原博史「女房文学から隠者文学へ——西行の位置——」(『論集西行』笠間書院、1980)。
- (22) 鈴木日出男『百人一首』(ちくま文庫、1990) 藤原定家「来ぬ人を」詠
- (23) 藤原俊成『古来風躰抄』初撰本(歌論歌学集成)